

読書により思慮深さを身に付けよう

—本をどんどん読もう—

開倫塾
塾長 林 明夫

Q：なぜ読書は大切なのですか。本を読むとどのような力が身に付くのですか。

A：(林明夫：以下省略)学校の先生や家の人から「本を読んだほうがいいよ」とか「本を読みなさい」とあまりにも多く言われるために、逆に反抗心が生まれて「本など絶対に読まない」と思ってしまう方も多いのではないかと思います。ただ、それでは、あまりにももったいないと思います。

では、なぜ学校の先生や家の方は、皆様に本を読むように言うのでしょうか。少し冷静になって考えてみましょう。

私は、読書は何のためになる、もっと言えば、読書によって何が身に付くのかと問われれば、「思慮深さが身に付く」と答えます。

Q：「思慮深さ」とは何ですか。

A：「思慮深さ」とは「ものごとを自分の力で深く考える力」、「自分自身を省(かえり)みる、振り返る力」であると、私は考えます。

本を読むことは作者・筆者との対話であると、私は考えます。一つ一つの文章は、作者・筆者の人格のほとぼしり・表れであり、読者であるあなたに伝えたい・語りかけたいことの固(かた)まりとも言えます。

作者・筆者が読者であるあなたに訴えかける一つ一つの文章は一体どのような意味なのかを、「ああ、これはこのようなことなのか」と「納得」つまり「理解」しながら、自分のペースで少しずつ本を読み進めましょう。すると、読者であるあなたの心に触れる文章や、こんな考えもあるのかという文章に出会うことも多いと思います。

そのようなときは読むスピードを少し落として、これは一体どのようなことなのだろうか、作者・筆者は読者に何を伝えようとしているのだろうかとかじっくり考えることをお勧めします。

できれば、自分自身はこれからどうすればよいのだろうか、自分のこととしてじっくり考えることをお勧めします。

本を読んで本当に気に入った文章に出会ったら、「書き抜き読書ノート」を作り、たとえ一行、一文字でもよいから書き抜いておく。この本当に気に入った文章や語句を書き抜いた「書き抜き読書ノート」を「一生の宝物」として大切にし、生涯にわたって、つまり、死ぬまで折に触れて読み返すことを私はお勧めします。

自分のお気に入りの文章・自分のこととしてじっくり考えたことのある文章の「かたまり」である「書き抜き読書ノート」を、生涯にわたって繰り返し、繰り返し読み返すことは、その度ごとに深く、深く自分の力でものごとを考え、自分自身を振り返るきっかけになります。

その成果が少しずつ自分自身のものになって身に付き、人生において困難なことに出会い、それを乗り越える支えになったときには、皆様の「人格の基礎」が築かれるかもしれません。

Q：では、どのような本を読むと、「人格の基礎」が築かれるような「思慮深さが身に付く読書」ができるのでしょうか。

A：読みやすいと言われる村上春樹さんや中島らもさん、吉本ばななさんの本は、よく読むと内容が深く、読者である我々に訴えかけてくるものもたくさんあります。

98歳で詩人としてデビューを果たした柴田トヨさんの詩集「くじけないで」も素晴らしいものです。

このような現代作家の本もとてもよいのですが、激動の時代に生きた方の自伝もじっくり時間をかけて何回も読むと、時間の経つのがわからなくなるものが多いです。

例えば、ガンジーの自伝などは是非一度はお読みになっていただきたいと思います。

ガンジーの慰霊碑には、「7つの社会的大罪」として次のような言葉が刻んであるそうです。

原則なき政治 Politics Without Principles

道徳なき商業 Commerce Without Morality

労働なき富 Wealth Without Work

人格なき学識(教育) Knowledge Without Character

人間性なき科学 Science Without Humanity

良心なき快樂 Pleasure Without Conscience

献身なき信仰 Worship Without Sacrifice

福沢諭吉先生の自叙伝である「福翁自伝」も超お勧めです。「自分の未来は自分で切り開く」、「自己責任」「自助努力」、「自尊心」とは何かの本当の意味がよくわかります。

Q：塾長は、最近どんな本を読んでいますか。

A：私は、古典の勉強が足りないので、最近、孔子の教えをまとめた「論語」と、中国の唐の時代の繁栄を築いたと言われる太宗の教えをまとめた「貞観政要(じょうがんせいよう)」、それからソクラテスの弟子でアリストテレスの師であったプラトンの本を読んでいます。日本の世阿弥(ぜあみ)や、宮本武蔵の「五輪書」、正岡子規の一連の著作も子規の同級生の夏目漱石や南方熊楠(みななかたくまぐす)の本といっしょによく読んでいます。

Q：一番のお勧めの本は何ですか。

A：何回も紹介させていただいて恐縮ですが、内村鑑三(うちむらかんぞう)先生の次の三部作です。「後世への最大遺物・デンマルク国の話」と「代表的日本人」、「余は如何(いか)にして基督信徒(キリストしんと)となりし乎(か)」(すべて岩波文庫に入っています)の三冊が一番のお勧めです。一冊目は、いかによく生きべきかの総論と外国での代表事例。二冊目は、日本の代表的事例。三冊目は、では自分はどのように自分の人生に立ち向かいよく生きようとしたのかという御自分の事例と、私は三冊の本を関連づけています。

是非ご一読を。一回ではわかりにくければ、一生かけて何度でもお読み下さいね。

— 2011年9月21日記 —